



EVENT REPORT

ICT サイエンスカフェ京都

ゆるやかなつながりから
広がる連携



- 開催日 2010年9月29日(水)
- 会場 京都リサーチパーク 東地区1号館2F
サイエンスセンタークラブ
- 主催 京都大学大学院情報学研究所、
京都大学学術情報メディアセンター、
(財)京都高度技術研究所、
京都リサーチパーク(株)
- 後援 京都府、京都市、京都商工会議所、京都産学公連携機構
- お問合せ 京都リサーチパーク(株)産学公連携部
TEL:(075) 315-8522
ict-info@krp.co.jp



京都ならではのことで、文化、芸術ともリンクしたい。芸術的なことと情報工学は今までなかなか結びつくことがありませんでした。しかし、世界のトップになる人を日本が育てようとする今、研究者はもっと芸術にも目を向けるべきではと思います。

京都大学 情報学研究所
山本 裕 教授



本日お話しした内容は、セキュリティに、災害救助にと、応用範囲の広いもの。例えばレーザーを使ってのお年寄りの見守り。お風呂にカメラを設置するのは嫌なものです。レーザーだと受け入れられる可能性が高く、有意義です。「こんなことは可能ですか?」と、どしどし質問していただけたらいいですね。

京都大学 情報学研究所
佐藤 亨 教授

「大きなプロジェクトの取組みだけではなかなか上がってこない話がある。もっと街の人と親しくなることから始めよう」。

2009年度の「京都大学ICTイノベーション」実行委員長を務めた山本裕教授(京都大学 情報学研究所)は、こう語る。「地場産業に関わる人たちから見たら、京大は遠い。敷居が高いと言われます。一方京大から見ても、地場産業は遠い。けれどもともと京大はでっかい村みたいなところがある。私の父の世代には、市民から芸妓さんまで、学生帽をかぶった若者を皆で支えてやるみたいな気概が街全体にあった。そういうゆるやかで広い懐のなかで、京都の文化も育ってきたと思う。自然発生的に、何かやりたい。これまで京大と縁の薄かった地場産業の方々と連携していきたい。単なる名刺交換の場ではなく、もう一步踏み込んだ協働の場としたい」。そんな思いに呼応するかのように、第1回の会場はまるで居心地のよいサロンのようにしつらえられた。前方には、プロジェクターと講演者の椅子。それを扇状に取り囲むソファ。参加者は好みの飲み物を手にリラックスして、サイエンストークに聴き入った。

開会のあいさつは京都大学情報学研究所の中村佳正教授。「この集いを企画したのは、ICT連携推進ネットワークです。ICTとは時間や空間を越えて世界中が同じものを共有できるという事実です。そういう時代がくると、逆に世界にひとつしかないものが大切ではないか気づきます。“神は細部に宿る”というように細かいところまで作り込まれた完成度の高いものが望まれるでしょう。となれば、長い時の流れで洗練されてきた京都の地場産業は、まさに世界にひとつしかないものです。そのひとつしかないものとのつながりを、このサイエンスカフェで、京都大学も深めていきたい」と、地場産業へのメッセージを送った。

トーク1は山本教授が受け持った。司会を、同じく京大の佐藤亨教授(情報学研究所)が担当。テーマは「デジタルと信号と音の処理について」。一言で言えばサンプリングした音の間にどのような情報があつたかを補間する理論である。旧い録音では機器の特性から周波数特性が歪曲されている。しかし、補間することで瑞々しい音によみがえらせることができる。知らない人は「CDにない音を作ることになる」と言うが、実は「もともとあつた音を最適推定する理論」と教授。

佐藤教授によるトーク2のテーマは「電波と超音波で超解像度解析」。今度は、山本教授が司会を受け持った。相互司会形式だ。教授が説く解析方式では、電波を使って見えないところに隠れている物を見つけることが可能となる。困難な場所でも安定して作動できれば、高度な信号処理は災害ロボットにも応用できる。「そのうちレーダーが100円で買える時代がくるかもしれない」と教授。そうならば、さらに汎用性は高まる。

交流会では京都リサーチパーク(株)の左納社長が「企業の方と先生方の知恵がうまく出会い、コラボできれば、わいわいがやがやと双方向で交流していただきたい」と、活発な議論を促した。

